アートペーパー 76
ART PAPER
名古屋市美術館ニュース 2008年冬号（季刊）
Nagoya City Art Museum

特集

落下する種子、堆積するアレゴリー

――河口龍夫《関係―無関係・落下、集積、命の形態》を巡って

昨年開催した特別展「河口龍夫―見えないものと見えるもの」（2007.11.3.－12.24.）は、1970年代以降の現代美術の表現「様式」ともなったインスタレーションの魅力を遺憾なく見せる展示であった。なかでも、名古屋市美術館の展示空間の特性を考えた新作《関係―無関係・落下、集積、生命の形態》は、観客参加型作品として日々その形状を変化させる、これまでの作家の作品にはない新たな一面を見せるものとなった。当館でも、久々の本格的かつ良質のインスタレーションの展示となったこの作品について、分析・解読を試みようとするのが以下の文章である。

〈作品の構造〉

今回の展示に於いて、河口龍夫のメイン・モティーフとして選ばれたものが、ヒマワリの種子である。展覧会のために、カナダ産ヒマワリの種子、およそ4.5tが用意された。ヒマワリについては、その種子の大きさと形状、さらには向日性という特性と認知度から選ばれたが、果たしてその象徴性や隠喩が展示に重層性を与えることとなった。

新作《関係―無関係・落下、集積、生命の形態》は、二階からおよそ2.8mの透明パイプが、吹き抜け中央部、一階の床からおよそ６mの高さにその先端が位置するように設置された。一階に於いて、観客は時折パイプに注ぎこまれ、滑り落ちる摩擦音の後に、その先端から放物線を描いて落下し、宙空に舞う種子の軌跡を見ることになる。

種子の落下点には、1993年に発表された《関係―鉛の音、種子の音》が設置された。夫人から娘に引き継がれ、長年弾かれてきたピアノとその椅子は、厚さ0.3mmの鉛によってその全面を巻かれ、梱包されている。唯一“無垢”のまま残された鍵盤には、100粒のコスモスの種子を封印した鉛のオブジェが置かれる。ここで、作家は「儀式」にも似たアクションを行った。1オクターブの長さを持つその鉛の塊を、作家が鍵盤に落とした瞬間、１オクターブの和音が発せられるが、ピアノ自体が鉛に包まれているため、その響きは、重くこもった短いものであった。鍵盤は鉛のオブジェの自重によって抑えられ、１オクターブの和音を発した状態でとどめられる。そして、鍵盤の蓋は閉められ、その下でつまり、コスモスの種子が１オクターブの「聞こえない」和音を発し続けることになる。やがて、そのピアノの上に種子が蒔かれることになる。

その最初の一握の種子が落下し、ピアノの天部に当り、跳ね返る様は象徴的なものであった。一瞬、宙空を舞った種子は、鉛で覆われたピアノの天板に叩き付けられ、弾かれ、飛散する。デジタルカメラで撮影されたその様子は、種子一つ一つがまさに生きているようにも見え、あのカタストロフの光景をも思い起こさせる。落下し、堆積する種子のその軌跡は、ライトに照らされて金色に輝くことになる。

種子を蒔くと言う行為と、スポットに照らされた種子自体が、ある趣エロティシズムの隠喩でもある。その光景に、例えば、ギリシャ神話のダナエの物語を想い起こすことは、さほど困難なことではない。

河口龍夫《関係―無関係・落下、集積、命の形態》2007年12月26日（最終形態）

《関係―無関係・落下、集積、命の形態》
2007年10月11日（ピアノの天板に落下する種子）

ダナエの父、アルゴス王アクリシオスは、自分の娘つまりダナエの子によって殺されると預言される。その預言を回避すべく、父はダナエを青銅の塔（部屋）に閉じ込め、娘の貞操を守ろうと努めた。だが、ゼウスは黄金の雨に身を変じて、ダナエの膝に流れ入り、彼女と交わることになった。

「受胎告知」の予型として、また、父娘の関係を象徴するこの『転身物語』のシーンを、河口の新作《関係―無関係・落下、集積、生命の形態》は、偶然にも、しかし見事なまでに現出している。

雨ならぬ、種子、それも太陽を象徴するヒマワリの種子が降り注ぎ、そして、ここでは、ダナエは、種子の堆積により埋もれていく母娘が弾いていたピアノとして、そしてそのピアノは、青銅ではなく鉛によって“封印”されることになる。

〈物質的想像力〉

河口の作品、とくにスペクタクルまで見せるこの新作は、さまざまなアレゴリー（寓意）を見せる部分や材質によって構成されている。また、この新作以外にも今回の展覧会でエントランス・ロビーに展示された《関係―腰掛けた水》や《関係―椅子の上の種子》など、河口が用いる水や種子と言ったモティーフには、その擬人化とともにある趣の象徴が込められているこ

（参考）グスタフ・クリムト《ダナエ》1907－08年

アートの旅「過去・現在・未来」

（彫刻家・名古屋市美術館参与）
石黒 鏘二

風景の中で　その一
攻撃的エネルギーが持つ「問い」

表現に対する人間の欲求は無限である。それが、朝目覚めて夜寝るまでの個人的日記風レベルの中での行為ならば、舞台はともあれ、それはどこまでもパーソナルな出来事としてさほど問題を与えない。

また、ミニスカートの発生の地といわれるロンドンのカーナビーストリートや、ミュンヘンのオープンカフェや、東京・渋谷の街角で繰広げられるパフォーマンスなどで、いずれ小銭を要求する帽子が回ってきてもこれもさほど腹は立たない。そこには当然の代償とも納得できる半端でない熱気があるからだ。しかしわれわれは、時に日常的生活空間の中で、反社会的行為としか思われない表現に出会い戸惑うことがある。特にそれが、人々が共有する公共空間という場でのこととなると気に留めない訳にはいかない。

今やそれは、ヨーロッパの町々に限らないが、暴力的ともいえる攻撃性が執拗に徹底的に都市を覆う。その代表的一つがグラフィティーである。スプレーや大型マジックペンによる落書きだ。パリのリュクサンブール庭園の白亜の大理石の彫像のすべてにそれを目撃してからもう何年になるであろう。時のミッテラン大統領が誇るパリ再開発の花形アルシュを擁するデファンス地区も直ちにその餌食になったし、ニューヨークの地下鉄も、ひと頃その代名詞にもなっていた。

ある日ベルリンで、ペルガモン博物館に向かう国鉄Sバーンの真新しい車両に乗り込んで驚いた。新品のビニールシートによる全座席の座る部分と背もたれ部分が、丁度フォンタナの「絵画」と同じように、右上から左下へ鋭利な刃物で悉く切られていた。しかもそこにはご丁寧に「ART」と太書きされたスプレー文字があった。その時の戦慄に近い驚愕を今もはっきりと思い出す。

しかし、これらの攻撃的な反社会的エネルギーを、頭から否定できる資格をわれわれは持つのだろうか。勿論、否定すべきは否定しなければならない。だが、パブリックアートと称して、公共空間を謂わば私物化してきたとも言える彫刻家の端くれの一人として、形を変えたもう一つの暴力のことも考えざるを得ないのだ。それらのグラフィティーが放つ強烈なエネルギーを前にしながら、それらが持つ「問い」に、耳を傾けなければならない。

時の話題

日の暮れは過たず冬の到来を知らせてくれますが、どこか夏の余韻が抜けきらない今秋です。

名古屋市美術館では文化の日から特別展「河口龍夫―見えないものと見えるもの―」が始まりました。生命の在処を通して時間の質量を感じ取らせてくれる展示には、思いもかけず夏の名残と宇宙の運動を知らしめる「もの」がありました。今では普通に見かけることの少なくなったひまわりの種。そして、小さなフーコーの振り子。

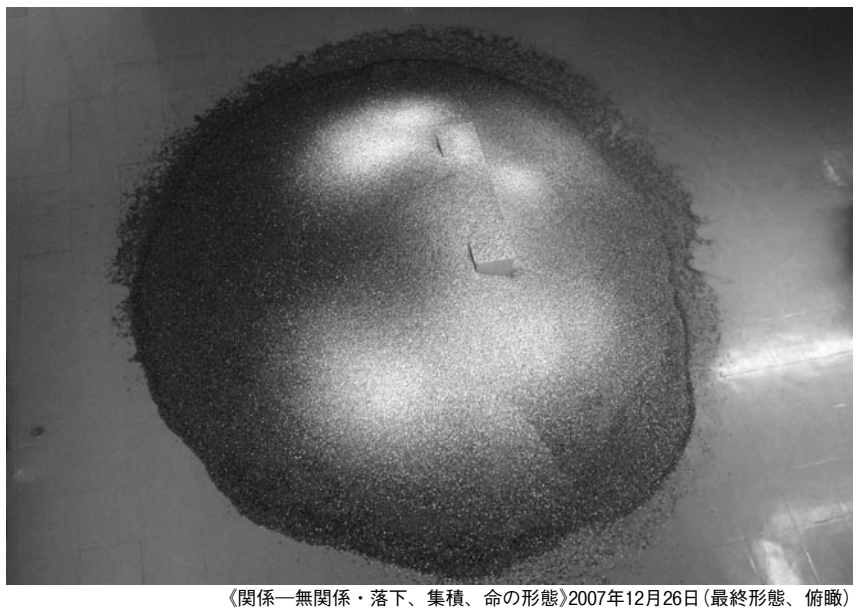
秋は祭りの季節です。半田の山車まつりでは今年、五年ぶりに地区に伝わる山車が一同に会しました。当館近くの若宮八幡社でも、春の祭礼には山車が曳かれ、からくりを楽しむことができます。名古屋まつりにも協賛して、曳きだされています。地域おこしに各所でまつりが新しく工夫されているようですが、廃りかけたものにもう一度人々の目が注がれるのも意味のあることのような気がします。

当館も毎年名古屋まつりの日曜日は常設展の見学が無料になります。今年は1,000人を超える入場者でした。無料ということもありますが、名古屋まつりの市を挙げての広報が、美術館のあることを思い出させているのかもしれません。あまたから美術館を選んでくださったのは、ありがたいことです。

今年、美術館は自前でお祭りを用意しました。大人も子どもも自由に参加できる美術とかかわる遊びを、すべてのロビーを会場にして行いました。子どもを中心に人々がつどう様子は、いつにないなごやかな活気をもたらしていました。

年の末に話題になるのは逝かれた人のこと。設計者として当館とも縁のある黒川紀章さんの訃報は驚きでした。

もうひとり、若桑みどりさん。男性の視点で記述された美術の歴史に女性のそれを持ち込んだ先駆けでした。今、女性の美術史研究者、学芸員は男性を凌ぐほどです。こうしてあることの大きな一翼を担われたことを感謝し、ご冥福を祈ります。（み。）



《関係―無関係・落下、集積、命の形態》2007年12月26日（最終形態、俯瞰）

とが窺えよう。例えば、作家自身が表明しているように、種子に対する「未知のエネルギー」や「不可視のエネルギー」という隠喩は、比較的理解されやすいものである。また、「水」に関しても、そこにはナルシスやオフィーリアにまつわる物語に思いを巡らすことができよう。

そうした素材としての物質にまつわるアレゴリーについて、鉛と言う素材は、より説得力あるものとなっている。1986年から銅に代わり、作家は鉛を使用することになるが、作家自身は、鉛で覆うように変化した要因に、その年1986年４月26日に起こったチェルノブイリ原発での事故を挙げている。種子を生命エネルギーの象徴としてとらえ、それを守り、再生を期して保存するために、鉛の性質が注目され、採用されることになった訳だ。こうした素材やモティーフに込められた意味やそこに確認できる象徴については、とくに、水に対するそれに明らかなように、フランスの批評家・科学哲学者であるガストン・バシュラール（Gaston Bachelard ： 1884～1962）のアプローチを思わせるものでもある。物質の直接的イマージュによって、本質と内面を夢想し、そのことによって開かれた想像力が引き出されるとしたバシュラールの考察に対して、河口はオブジェとして、またインスタレーションとして、それを現出する手法を採る。

〈「関係」というロジック〉

だが、一方でそうした素材にまつわるアレゴリーが逆にその作品を規定して行くことにもなる。例えば、それまで、伝導性の高い銅を素材として使用し、「交通」や「伝導」、或いは「反応」といった〈関係〉を観る者に“黙示”してきた作家の作品は、鉛を採用することによって、やがてそのテーマである〈関係〉の対象とその意味合いに微妙な揺らぎを生じさせて行くこととなった。それまでの〈関係〉は、銅が鉛に代わることによって、外界との接触を断つかのように「封印」、保存され、一見すれば、正しく「不可視」のオブジェとして没・〈関係〉を提示する。だが逆に、その〈関係―無関係〉というタイトルこそが、観る者にその〈関係〉について改めて再考を促し、作品にはさらなる隠喩が込められることになる。

勿論、河口と同時代に物質性を強調した作家やムーヴメントがなくはなかった。だが、素材となる物質が互いに衝突し、その組み合わせに意外性を見せる、シュールレアリスムが編み出した“デペイズマン（追放、置き換え）”の様相やオブジェの側面を見せながらも、河口の作品に於いては、そうした直接的な物質性の提示はさほど重要ではない。むしろ、物質が齎し観る者に働きかける象徴性の機能、それこそ「物質的想像力」と呼ぶべきものが、河口作品の重要な要素であり、魅力でもある。彼の制作のテーマでもある〈関係〉が、人と人、或は作家と作品と観る者、物質と人間のそれであることも示唆しながら、オブジェや彫刻としてではなく、重層的に想像を喚起する為の正しく装置（インスタレーション）として現出する、それこそが、新作《関係―無関係・落下、集積、生命の形態》である。

〈主体と行為〉

「物質的想像力」を誘う要素とともに、この新作には、ミニマル・アート以後の所謂、「現代美術」の要素がふんだんに盛り込まれている。

例えば、主体／行為の問題。「行為」に関して言えば、種子を蒔き、作品を形成して行くのは作家自身ではない。銅製のスコップで「掬って、注ぐ」という“作法”が課され、その結果生み出される種子の山の形態やその高さ、裾野の広がり等は、予め作家によって想定されているとはいうものの、作品は作家自身の手を離れ、観客にゆだねられることになる。つまり、観客はもう一人の制作者とも言うべき、「行為」の主体として位置づけられ、「経験」によって作品と新たな〈関係〉を持つこととなる。言わば、作家と観客とのコラボレーションによって、この作品は成立し、形成されて行く。

また、落下し堆積して行く種子の「運動」とともに作品の重要な要素となっているのが、「音」の作品への導入である。実際、この作品をまず“感知”するのは、展示室内ではなく、エントランス・ホールであった。その全貌を「視る」前に、「聞こえる」音によってその存在の“気配”を察知し、観客は展示室へと誘われる。作家が鍵盤の上に鉛の塊を落とすことによって発生し、そして発せ続けられる“聞こえない”和音と、種子がパイプを滑り、落下する際の摩擦音。内なる「音」は環境としての音に打ち消されながらも、内部と外部の音は拮抗し続けている。つまり、「音」の要素は、ここでも“入れ子”状態として作品の要素として構成・導入されている。

新作《関係―無関係・落下、集積、生命の形態》の構成要素とその意味を考えた時、さまざまな要素の多面体としてありながら、本作品が優れて統一的・総合的なインスタレーションとしてあることに気付かされよう。

〈二つの視覚〉

そして、何よりも、新作《関係―無関係・落下、集積、生命の形態》は、観る者に二つの視点を供することになった。作品のレベル、つまり一階展示室（＝地上）では、刻々と堆積して行く円錐形の“種子の山”を、また“行為”の場となった二階の種子を蒔くステージからは、落下し、滲むかのように、あたかもその領域の版図を拡張して行く不定形の円を俯瞰することになる。自らの「行為」の結果をも対象化して見せるその俯瞰の光景とは、吹き抜け部分があたかもフレームのように機能することも相俟って、超越的な視点を供し、その視点によりながら、観るものは自身が関わった作品との「時間」＝〈関係〉にまで意識を廻らせることになる。また、予測はするものの、作家の意図やコントロールを越えて拡張し変化し続けるその地と図の関係は、はからずも作家がインスタレーションや立体と並行して、制作し続けて来た平面作品を思い起こさせる。個々の種子の物質感よりも、集積した版図を見せるその光景は、まさしく作品の「時間」と、「行為」の“フロッタージュ”とも呼ぶべきものであった。

展覧会の開幕時点では、ピアノの椅子が埋没した状況で始められた。展覧会の開催日数は45日、入場者数は6,800人あまりだった。4.5tの種子のうち、この作品には、三分の二、およそ３tが割り当てられた。

展覧会が終了し、クリスマスの日に撤収が始められた。展示作品が解体され、その姿を消していく中で、新作の種子の落下は最後まで残され、展覧会終了の翌日も作家によって、さらに種子が落下されることになった。だが、用意された全ての種子を撒き終えても、ピアノは完全には埋まらなかった。（J.T.）

展覧会の舞台裏

カタログ 9

展覧会のカタログはいつまでに完成していなければならないか？　我々美術館関係者にとっては自明のことですが、一般の方にとっては、はて？　いつまでなのだろう、と一瞬迷われるかも知れません。答えは展覧会が始まる初日までです。展覧会が始まって、来館者の皆さんが美術館に作品を見に来ているのにカタログができていない、ということは許されないからです。いや、少し前なら初日にカタログがなくてもそれほど問題になることもなかったかも知れません。展覧会は作品と直に触れあうことが何より大切なのであり、カタログはあくまでも副次的なものに過ぎないのですから。しかし、これまで繰り返し述べてきましたように、近年は展覧会に占めるカタログの重要性がどんどん高まり、それに応じて内容も充実し、来館者の方々のカタログに対する期待も高まっています。その皆さんの期待に応えないということは許されないのです。何が何でも初日までに完成させなければなりません。カタログが展覧会の初日（一般公開の前に、関係者に向けての内覧会がある場合はその日）までに完成しているということは、原稿を書いたり、写真を集めたり、レイアウトをしたりという作業は、当然それよりも前に完了していることになります。カタログの内容や仕様によっても若干違いますが、印刷や製本で２週間必要として、それまでに文字や図版の細かな修正は終わっていなければなりません。すると原稿や写真の入稿は最低でも１ヶ月前には済んでいるはずです（何事にも例外はありますが、ここでは一般的なケースをご紹介します）。最近のカタログはとにかく文字情報が多く、参考図版や資料類も充実していますから、準備を始めるのは最低でも数ヶ月前から、早ければ半年前から原稿を書いたりすることもないではありません。と、ここまでお読みになってすでにお気づきの方もいると思いますが、展覧会のカタログ原稿の執筆は、実は作品が無いところで進められるわけです。展覧会のために作品が集められるのは、どんなに早くても初日の２週間ほど前、普通は１週間前になってようやく全ての作品が会場に集まり、それから展示にかかるわけで、原稿を書いている段階では、展覧会はまだ影も形も無いわけです。これは考えてみれば不思議なことです。すでに書きましたように、カタログとは本来一過性のものとして消えてしまう展覧会の内容を後世に伝えるための記録として存在するはずで、その展覧会が始まる前にカタログが完成しているというのはあり得ないことなのです。企画者の頭の中にしか存在しなかったコンセプトが、会場で作品によって具体的な形を与えられて初めて見えてくるもの、理解できるものがあるはずで、それも含めて全て記録することによって初めてカタログの本来の意義が果たされるはずなのです。ところが、とにかく展覧会初日にカタログを間に合わせることが至上命題となってしまい、そのために色々な歪みが生じてきています（以下次号）。（F）

感想ノートから

中村宏・図画事件1953－2007展

2007年７月21日㈯～９月17日㈪

中村宏の作品に衝撃を受けた若い人たちが、たくさんの感想を残してくれました。

▲中村宏さんの絵は初めて見た。「これは事件だ」に魅力を感じ、この美術館にやってきた。すごく個性的で、次から次へといろいろな発想が湧き出てくる感じ。とても好き。機械やセーラー服の絵が多かったけれど、どの絵もユーモラスな面が練り込まれていた▲初期のルポルタージュ作品の生々しさ迫力に圧倒されました。考えさせられるのに、純粋に見ていて楽しい、という絵画はすごくすごく貴重で有難いものなんだと思いました▲（場所の兆の）こんな暗い赤い黒が夏の日の午後に襲ってきたとしたら、私たちのなす術は何もないでしょう。ただ呆然と赤い雲に飲み込まれてゆくような感じがしました▲便器、こいつが最高だ。説明的絵画でないのがいい▲中盤にあった女学生のマネキンが作品を双眼鏡で覗いている作品にはビックリしました。見たらいけないモノだと思いました▲不思議な女学生たち。日本の“萌え”の原点を見たような気がします。ただかわいらしいでは済まされない気持ち悪さ、残酷さが“萌え”にはあります▲吐き気を感じるような不快感と戦いながら観させていただきました。魅力的でありつつ自分の中にある恐怖を引きずり出されるようで、観ている途中、楽しくも苦しかったです▲HUDSON-C62をみて、不思議な感覚になりました。自分も一緒にどんどんどこかへ落ちていくような。先がわからない恐怖▲窓の向こうに世界がありました。さわれはしないのだけど、確かにそこに空間があるようでした▲小学校の図書室で読んだ『ぴかぴかのぎろちょん』の挿絵でショックを受けて以来、20数年ぶりの再会でした▲なんとなくで見にきましたが、とてもたのしかったです。とくにタブロオ機械Ⅱ-Bを見たときは鳥肌が立ちました！▲２才の息子は「でんしゃ、でんしゃ♪」と喜んでいました。今日の出来事は彼の脳裏に焼きついているでしょうか？▲絵図連鎖にしびれました▲描き上げて何年も経つ作品なのに見る人に与える衝撃は変わらないのだと改めて思いました。いつまでも創り続ける力、ずっと持ち続けたいと思いました。（sy）

展覧会 現在進行形

アメデオ・モディリアーニ展

2008年４月５日～６月１日

2008年、名古屋市美術館は開館から20年目の節目の年を迎えますが、これを記念してモディリアーニの回顧展を開催いたします。当館には現在4000点近い作品が収蔵されていますが、その中で最も人気の高い作品を１点選ぶとなると、やはりモディリアーニの《おさげ髪の少女》ということになるでしょうか。この作品がコレクションに加わったのは美術館が開館する１年半ほど前のことになりますが、以来まさしく看板娘として新聞、雑誌、テレビなど、あらゆるメディアに登場して当館の名前を広めてくれています。さて、その作者のモディリアーニですが、エコール・ド・パリの重要作家として従来から高い人気を誇っていましたが、近年その評価はうなぎ登りというほどの凄まじい高まりを見せており、欧米各地の美術館で毎年のように展覧会が開かれ、またオークションでは20億円近い金額で落札されるなど、新たなブームの到来か、と思わせるほどの取り上げられ方です。なぜ今モディリアーニなのか、という問いに答えることは容易ではありませんが、この画家の人気の高さが、最早伝説と化しているその人生と不可分であることは間違いありません。近代美術は作品から物語性を削ぎ落とすことによって発展してきましたが、モディリアーニの作品は逆に過剰なほどの物語とともに常に存在してきました。しかし、そろそろそのような物語に付随した解釈から作品を解き放つべき時が来ているのではないかと思います。この画家が活躍した1910年代は、ヨーロッパ美術の激動期であり、彼の作品にもその痕跡がしっかりと刻印されています。伝統的に見えるその作品の背後には、同時代の作家たちの前衛的な試みの影響が随所に見られ、この画家が紛れもない20世紀の作家であることを教えてくれます。歴史の文脈の中に正しく位置づけた時、その作品がどのような表情を見せるのか。モディリアーニの新たな魅力をご紹介するこの展覧会。どうぞご期待ください。（F）

どこがおもしろい?!

今回は三岸好太郎(1903－1934)の《構図(暖炉のある静物)》(1933年)をご覧になった来館者の皆さんの感想、意見をご紹介します。

「あかいもののなかにガラスのこっぷが、はいっているのがおもしろい！」(さえさん、6歳)

「グラスが置いてある。茶色いのは変な物体、黄色のは犬のおもちゃ、暖炉の上にはいろんなものを置いている。昼かたづけもしないでそのまま出かけていったように見える。」(N.Kさん、13歳)

「赤色の物はエサ入れで、黄色は骨、茶色はドッグフードに見えたので、この家では犬を飼っているのかと思った。」(Kurogaさん、13歳)

「あの黄色い物はなんなのか、気になりました。親に聞いても『わからない』といわれてがっかり。黄色いのは、わからないまま。むらさきのは、ぶどうだと思いました(おいしそう)。だれかが“ワイン”とかいてあるけど、私はカギだと思いました。」(AKARIさん、9歳)

「私がこの作品で好きな所は、レースの布がふんわりとかかっているのと2色の暖かい色合いがあるところです。柔らかい暖炉の前のダイニングでワインを飲みながらホッとひと息!!思わずひたってしまいました。」(主婦さん、48歳)

「《暖炉のある静物》とあるが、実際に静であるのは暖炉だけのように思う。他のグラスやら葡萄やらといった物は画家によって動に変えられていやしないか。それぞれの内的な物が爆発してはみ出している。故に、力強い作品という風に思うわけである。」(CHEEさん、26歳)

三岸好太郎《構図(暖炉のある静物)》1933年

「たぶん幸せなのでしょうね。思いっきり大きく赤と黄で表されています。暖炉に火はともっていませんが、でも何となく満たされている??いい事があったのですね、きっと。」(WAKAさん、47歳)

「この絵の描き方で1番好きなのは、形にこだわってない所です。机の足は両方太さが違っているし、机の上に置いてある物も形が異なっていて、そこに愛らしさが感じられました。」(Ma-yuさん、14歳)

「色がついているところをみてほしいのかなと思いました。ぶどうのつぶをあらわす線が工夫されてるなと思います。」(うしちゃんさん、13歳)

「全体的に暖かい印象を受けます。ぼんやりした赤と黄、紫の色の構成が空間の温度を表しているような気がします。言葉にすると『あったか～い』って感じです。」(H.Aさん、22歳)

「何故か、右側の黄色の大きなやつはあたたかく、そしてつよく、左側の2つのものをつつみこんでいるようにみえます(一番うしろに配置されてるし)。お父さんなのかな。で、赤いのがお母さん。そして、紫がこども。暖炉のまわりで団欒、食事をしているような家族のイメージがわきました。」(チビヤマさん、25歳)

「具象的でなくてぼんやりとしたひとつひとつのアイテムがおもしろいです。観ている“私”は眠りそうで眠っていない半分夢で半分現実の、うつらうつらしたまどろみの中にいる、というイメージを持ちました。空間にある色もシンプルで落ち着いていて、とても心地良い気持ちになります。この絵を観ることで“ふわり”と浮き上がって遊べる感じがしました。好きになりました。」(かずのりさん、27歳)

「カメレオニズムを信奉する」と本人が画家仲間に語ったと伝えられるように、三岸好太郎はその様式を一言で表すのが難しい画家の一人です。旧制中学を卒業後、独学で絵を学んだ三岸は、春陽会の第1回展に入選してその実力を認められ、独立美術協会の立ち上げに最年少の会員としてかかわりました。その後31歳でなくなるまでの10年あまりの画業の中で貪欲に研究を重ね、目まぐるしく画風を変化させていきます。

1932年頃からは絵画作品を構成する造形要素を客観的にとらえ、作品に反映させる実験に取り組みます。《構図(暖炉のある静物)》では、暖炉を思わせる横向きのコの字型、曲線で囲まれた有機的な形態と暖色系の色彩、そして三岸独自の表現である、釘やペインティングナイフなど先の尖った道具で絵具を削って作り出した引っかき線を見ることが出来ます。引っかき線には何度も平行に走らせたもの、二重・三重に交差させたもの、渦を巻いたもの、一筆書きなどのバリエーションがあり、少ない要素の中で多様な表現を可能にしようとする画家の自由な発想と創意工夫が感じられます。

今回もたくさんの方からコメントをいただきました。ご協力ありがとうございました。(3)

美術館Q&A

常設展に現在活躍中の作家の作品もありましたが、現代美術の作品を買い付ける時は、どのような判断基準で行っているのですか？(岐阜県　K.Kさん)

現代の美術をどのように収集するか、これは非常に難しい問題です。時代の経過や社会の変化ともに、作家の作風や作家に対する評価も変化します。また、ゴッホの生前に売れた作品が1点だけだったという有名な逸話がありますが、将来のゴッホを捜せとばかり、「先もの買い」的な収集を目指せば、当然大きなリスクも伴うからです。

名古屋市美術館の現代の美術の収集方針は、時代的に戦後から現在まで、またニューヨークに渡り、国際的に高い評価を受けていた荒川修作、河原温、桑山忠明がこの地方出身だったことが、名古屋市美術館で現代美術を収集するきっかけとなりました。そのため、彼等の作品の系統だった収集と、彼等との関わりで、戦後の日本の美術や、同時代に活躍した作家の作品が収集の中心的な対象です。美術館は美術の歴史を貯蔵していくところなので、その作家が評価されるきっかけになった作品、あるいはその作品と同時代あるいは同シリーズのもの、初期から時代毎にキーとなるような作品といった、美的感覚だけではなく、歴史的に系統立てるということも、作品選定の重要な基準になります。質と大きさが公開に適しているということも重要ですが、現実的に、予算の範囲内であるか、価格が適正か、あるいは、収集後に作品を常設展で生かすことが可能か、収集後、保存、展示に適しているかということも判断基準になります。これらを満たした上で、名古屋市美術館で収蔵するに相応しいかどうかが話し合われ、その決定はさらに外部の専門家による「収集委員会」でなされます。購入は市の予算で行われ、市民の利益になるよう、出来る限り客観的な評価をもとに選定を行い、「青田買い」的なリスクの高い収集はしません。とはいえ、美術は感性と深く関わるものである以上、これらの基準と職員の作品や作家に対する愛情や尊敬を込めた調査をもとにした作品の選定には、常に美術館の「目利き度」が試されていることも事実でしょう。

また、名古屋市美術館ではもう一つ、現代美術に関する収集方針に、1980年以降の同時代の作品を継続的に収集し、将来は歴史を展望できるコレクションを目指すというのがあります。しかしながら、ご存知のように近年は財政状況が非常に厳しく、収集もなかなか思うようにはいきません。近年この地方の作家をはじめ日本人作家の国際的なアートシーンでの活躍が華々しい中、現在の日本の現代美術の発展を充分に紹介できていないのではないか、という焦りがあります。同時代の優れた作品を後世に伝えることは美術館の大きな使命であり、大変厳しい状況ではありますが、少しでもその責務を果たせるよう努力していきたいと思います。(hina)

※ご質問を頂いた岐阜県のKKさんに「アメデオ・モディリアーニ展」の招待券をお送りします。

郷土の作家たち

服部有恒(はっとりありつね／1890－1957)

学者の子として名古屋に生まれる。名古屋の地では、伝統的に人気のあった復古大和絵系の画家森村宜稲(もりむらよしね)に学ぶ。東京美術学校卒業後は、大学の先輩に当たる松岡映丘(1881－1938)に学んだ。松岡は、院展を中心に日本画革新が盛んになる時代にあって、画題、画風ともに、革新を意識しつつも、伝統的な日本画の範疇の中で描き続けた人物であり、服部も基本的にそこからはみ出すことはなかった。服部は松岡の下で歴史画を多く学び、大正10年(1921)の第3回帝展で初入選を果たす。以後、大正14年(1925)の第6回帝展で《安芸守敦盛》で特選、昭和3年(1928)の第9回帝展でも特選を受賞する。昭和6年の第12回帝展では《小敦盛》で無鑑査となる。昭和11年新文展の招待展にも出品し、伝統的な日本画の分野でポジションをあげていく。この背景には復古的な時代の流れの後押しという要素があったことも、もちろん考慮に入れる必要はあるだろう。戦後の昭和30年(1955)には、帝展・文展を継承した日展の参事となった。

一方、昭和7年(1932)、山口蓬春、伊藤深水らと、青々会を結成する。昭和10年(1935)からは、武蔵野美術大学の前身である帝国美術学校(1929年開設)の日本画教員として山口蓬春、小茂田青樹、郷倉千靱の後を受け、奥村土牛、土田麦僊とともに教鞭を執ることとなった。ここでは戦後まで継続して教鞭を執った。同じ年、東京美術学校を辞した松岡映丘が「国画院」を創設すると、初期からの会員として、そこに参加した。二年後には映丘の死で同院は解散したが、有志と日本画院を結成し、没するまで同会に出品した。その作品は、大和絵を継承したあくまで伝統的な日本画の標準的スタイルである。しかし、本の表紙や見返しの絵を描くなど、小技がきくという日本画の良い面をも併せ持ったという印象は強く、捨てがたい魅力を放っている。(hhk)

服部有恒《業平観梅》1930年

矢橋六郎(やばしろくろう／1905－1988)

1905年岐阜県不破郡赤坂町(現大垣市)生まれ。1923年岐阜県立岐阜中学校を卒業後、上京し川端画学校洋画科に通う。そこで村井正誠、山口薫と知り合う。1925年、東京美術学校西洋画科に入学、山口薫と同級生となる。1930年、大学卒業後、渡欧。ヨーロッパ滞在中、山口、村井に再会する。1933年帰国。1934年長谷川三郎や山口、村井とともに「新時代洋画展」を結成。1937年には「自由美術家協会」を創立会員として立ち上げる。1941年には旧満州、新京(現中華人民共和国吉林省長春市)に渡り、矢橋大理石廠株式会社勤務。1945年には兵役に服すが、1946年に帰国。帰国後は家業の矢橋大理石商店取締役に就任するも制作を続け、1950年「モダンアート協会」を創立会員として立ち上げる。1959年に武蔵野美術大学講師に就任して以後、東京芸術大学でも教鞭に立つなど教育にも携わる。戦後は多くのモザイク画を制作し、地下鉄矢場町駅と松坂屋出口の間の壁画をはじめ全国で現在も多くのモザイク壁画を見ることが出来る。

経歴にみられるように、戦前、戦後ともに既存の画壇に入ることをよしとせず、美術界に新たな動きを作ろうと次々と会の創立に携わる。画風は、青年時代にフランスで目の当たりにしたフォービズムやキュビズムなどの影響のもと、抽象的な形態を使用しながら、あくまで具象を貫いた。新たな絵画理論を実践しようとする奇抜で革新的な画面という訳でもなく、またほとばしる感情にあふれる画面という訳でもない。一見素朴に見えるが、抽象と具象、モダンと古代、西洋と東洋的なものが矢橋流に入り交じり、洗練された感性で作られた画面は、絵画という表現の本質を体現している。抽象的形態を使ったすっきりした画面は、自然が作り出した美しい大理石で作られる壁画表現にも適していて、建築の装飾として、人間の手の暖かみとともに、懐かしさを感じさせる町の風景になっている。モダンアートとしての絵画を探求し続けた。(hina)

矢橋六郎《鎧》1939年／1977年

展評

足助町から移築された古民家を使ったアートコラボレーション

「きのあうところ」

2007年11月１日㈭～11月11日㈰
長久手たいようの杜　古民家

愛知県長久手町で行なわれた「ながくてアートフェスティバル」の一環であるこの展覧会は、雑木林に囲まれた「たいようの杜」に移築された古民家を会場として開催されました。「たいようの杜」は、老人ホームやケアセンター、幼稚園、福祉専門学校などが点在する場所で、ひとつの暖かいコミュニティーを形成する稀有なスポットとなっています。そこに佇む古民家は、太い梁や囲炉裏、竈があり、長い時間の積み重ねを感じさせるものでした。

展示は、大薮幸博、フジイフランソワ、三田村光土里、米山和子といった、四人の作家の作品から成っています。大薮幸博は、家に上がってすぐの場所に古代の祭儀のような雰囲気を醸し出すインスタレーションを施しています。脚のついた土器がずらりと並べられ、そこに盛り塩とどんぐりが入れられています。何か神聖な雰囲気の漂う作品であり、古民家の古めかしさと呼び合うものを感じさせます。フジイフランソワの絵画作品は、屏風に描かれた不思議な生き物や、「一富士二鷹三なすび」といったモチーフが、すこし奇妙な、そしてユーモラスな印象を与え、秀逸でした。三田村光土里は、古い箪笥などの家具を組み合わせ、自身の歌をヘッドホンで聴かせるインスタレーション。古めかしい懐かしい記憶と美しい歌声が相まって、非現実的な世界へと導かれるような感覚をおぼえました。米山和子は、二階と屋根裏部屋を使って、和紙の人体像を展示していましたが、和紙の優しい色合いと、少し恐ろしげな感じとが場所とよく溶け合い、お米を使ったインスタレーションと共に、美しい空間を創り出していました。

どの作家の作品にも共通していえることは、この古民家の、長い時間の記憶を留めた闇と作品とが響きあい、それが神秘的ともいえる空気を漂わせていたことです。まさに、古民家と作品のコラボレーションであり、空間と作品とが幸福に交わった展示であったといえるのでしょう。（akko）

会場風景　撮影：山口幸一

展評

学芸員的には本年最高の展覧会

「日本彫刻の近代」展

2007年９月26日㈬～11月４日㈰
三重県立美術館

最近、日本の美術館では、採算率を最優先にした展覧会が数多く開催されています。西洋近代美術の巨匠の個展とか、世界的に有名な美術館のコレクション展とか、人気の流行作家を集めた現代美術展とか、ともかく動員力がありそうな展覧会ばかりが目立つようになっています。

このような状況のなかで、地味でマイナーな「日本彫刻の近代」の歴史を再検討してみようという意欲的な展覧会が、二つの地方の公立美術館と東京国立近代美術館（独立行政法人）の協力によって企画・開催されたことは、嬉しい驚きでした。

日本の近代・現代美術を専門にする美術館学芸員として、20年以上仕事をしてきましたが、意外なことに、「日本の近代彫刻」を展望できる展覧会は初めての体験でした。

これまでに見たことのある作品もありましたが、ばらばらの展覧会に、ばらばらのテーマで出品された作品を見るのではなく、時代順にじっくりと見ていくことができるという展示は、まさに展覧会というコミュニケーション手段の最大の利点を改めて感じさせて、圧巻でした。しかも、「日本の近代彫刻」の歴史において欠かすことのできない名作揃いで、これまで見たことのない珍しい作品もたくさん含まれていて、言わば『日本近代彫刻』という画集のページを捲るように、実際の作品を見ることができたのです。

この展覧会を見ているうちに、彫刻だけではなく、絵画（洋画、日本画）や版画も含めて、「日本の近代美術」の全体像についての新しい研究課題がいろいろと見えてきました。そして同時に、日頃の美術館活動のなかで忙殺されて、忘れかけていた調査・研究への意欲（美術館学芸員が決して失ってはいけないもの）を、もう一度取り戻すことができたように思います。

このような意味で、この展覧会は、「学芸員的には本年最高の展覧会」でした。（sy）

橋本平八《花園に遊ぶ天女》1930年（東京藝術大学蔵）

CULTURE, MOVIE, DRAMA, MUSIC & BOOK

愛知と青春の旅立ち

ーコンドルズと祝おう！ー

11月１日㈭　愛知県芸術劇場大ホール

愛知芸術文化センターは名古屋市美術館の開館から４年半後の1992年秋に開館しました。以前の県美術館、文化会館を統合してリニューアルした県下最大の総合文化施設ということもあって美術、音楽、ダンス、映像など複数の分野にまたがる企画にも積極的に取り組み、東海地方の芸術文化活動を盛り上げる一大拠点として機能してきたことは地元の皆さんもご存知の通りです。その開館15周年を祝う企画《芸文祭》が11月１日ー25日まで盛大に行われたのですが、火付け役となる最初の記念イベントを任されたのがダンスカンパニー、コンドルズです。

開館10周年記念公演にも参加していた彼らは学ランが目印。はた目にはあの舞台衣装がとてつもなく動きにくそうに映るのですが、男性のみで繰り広げられるスピード感あふれる力強いパフォーマンスはダンス以外にもコントや映像、人形劇、バンドの生演奏まで多岐にわたり、ここ数年で世界的にも大変な人気を集めています。コンドルズを主宰する近藤良平は教育テレビ『からだであそぼ』の「こんどうさんちのたいそう」やNHK総合『サラリーマンNEO』の「サラリーマン体操」の振付・出演もしており、幼児から年配の方まで幅広い年代の支持を得ていることが客席の様子からもよく解りました。この日は愛知万博のプレ・イヴェントや愛・地球博公演でも共演を果たしたコンドルズ・ユースAICHIのほか、一般成人の有志ダンスユニット・めんどルズ、公演を音楽面でサポートするTHE PONDORSも加わってステージを盛り上げました。

このような参加型事業は、市民が主体的にかかわる機会を設けることで芸術のより深い理解を促し、用意された催事を一方的に享受するだけの立場から、良き理解者として芸術文化活動を支援する立場になってくれることを期待して行われています。アーティストとの新たな関わりを通して生まれたもの（それを特定し具体的に説明するのは至難の業ですが）はそれだけで十分な財産となり得ますが、時と次第によっては、それを多くの人間と共有することでさらに響きあい増幅する可能性を秘めているようです。実は今公演中にも近藤良平の呼びかけに応じて出演者・来場者が一体となり、参加型イベント『千人のパフォーマンス』が展開されました。その場に居合わせた全員が一斉に同じ動作をするという非日常的体験に多少の照れはあったものの、徐々に不思議な一体感が会場を覆い、最後、全員の顔に晴やかな笑顔が宿ったのを目にして静かな感動をおぼえた方も多かったのではないでしょうか。

美術と同様、ダンスにおいてもコンテンポラリーは小難しい、何を表現しているのかさっぱり解らないなど躊躇される向きがあるようですが、理屈ではなく“自分の身体でじかに感じる”ことの楽しさをほんの数分で観客に体験させてしまうのがコンドルズ。年代や国境を超えて夢中にさせる理由はここにあるのかもしれません。（3）

イベントガイド

名古屋市美術館は1988年４月の開館以来、今年で20周年を迎えます。平成20年度はこれを記念して様々な特別企画を予定していますが、４月５日からその第一弾として「アメデオ・モディリアーニ展」を開催いたします。名古屋市美術館のコレクションの柱の一つであり、当館の看板娘でもある《おさげ髪の少女》を中心にモディリアーニの芸術の神髄をご紹介するものです。展覧会の開催と同時に、この画家の芸術をより多角的に検証するために、下記のような様々な関連事業を予定しております。どうぞふるってご参加ください。

■アメデオ・モディリアーニ展 関連事業

(1)記念講演会
日時：４月５日（土）午後２時～
演題：「モディリアーニの人と芸術：伝統と前衛のはざまで」
講師：ダニエル・マルセッソー氏（パリ・ロマン派美術館　館長）
会場：名古屋市美術館２階講堂（入場無料、定員180名、先着順）
＊マルセッソー氏はこれまでフランスとスイスで2回モディリアーニの重要な展覧会を開催しています。今回は故郷イタリアの伝統と、パリの前衛美術との間で形成されたモディリアーニの芸術について語っていただきます。

(2)作品解説会
日時：４月26日（土）午後２時～
　　５月17日（土）午後２時～
講師：深谷克典（名古屋市美術館学芸係長）
会場：名古屋市美術館２階講堂（入場無料、定員180名、先着順）

(3)映画上映会
「モンパルナスの灯」
４月15日（火）～20日（日）毎日午後２時～
会場：名古屋市美術館２階講堂（入場無料、定員180名、先着順）
「モディリアーニ　真実の愛」
5月18日（日）、25日（日）いずれも午後２時～
会場：名古屋市美術館２階講堂（入場無料、定員180名、先着順）

(4)記念トークショー
日時：５月11日（日）午後３時～
演題：「モディリアーニ：伝説を超えて」
講師：真野響子（女優）
会場：名古屋市美術館２階講堂（定員180名、往復ハガキによる申込制）
申込方法：往復ハガキに〒、住所、氏名、聴講希望人数（二人まで）、電話番号を書き、〒460-8511（住所不要）中日新聞社文化事業部「モディリアーニ展　真野響子トークショー」係まで。（４月28日必着）。抽選で聴講券を送付します。
＊美術通でも知られる真野響子さんは、モディリアーニ作品の熱烈なファンのお一人で、テレビ番組でフランスに取材に行かれた経験もお持ちです。真野さん独特の作品に対する見方やモディリアーニへの思いを語っていただきます。

(5)開館20周年記念コンサート
日時：４月25日（金）午後６時～
出演：セントラル愛知交響楽団
会場：地下ロビー

(6)ボランティアによるギャラリートーク
日時：４月22日、23日、24日、25日、５月８日、９日、14日、15日、16日
時間：10:30～、11:00～、13:30～、14:00～
※展覧会入場券でご参加いただけます。当日、会場入り口にお越しください。
※都合により休止する場合があります。

《横たわる裸婦》1919年、ニューヨーク近代美術館
Mrs. Simon Guggenheim Fund, 1950

協力会通信

協力会の秋のツアー

台風のなか横須賀美術館を訪ねて

先日（10月27日・28日）実施された名古屋市美術館協力会の秋の美術鑑賞バス・ツアーでは、横浜の三渓園と今春に開館したばかりの横須賀美術館、メキシコ壁画が公開されて話題の岡本太郎の美術館を訪ねました。

10月下旬にもかかわらず、台風が伊豆半島に接近していて、天候を心配しながら、朝８時に小雨のなか名古屋市美術館を出発しましたが、やはり横浜の三渓園に到着した頃には、激しい吹き降りになっていて、ゆっくりと散策できないままに（びしょ濡れで頑張った猛者も）、横須賀美術館に向かいました。

三浦半島の先端、太平洋が一望できる海岸に開設された横須賀美術館は、天気が良ければ最高の眺望が楽しめるのですが、訪問時にはちょうど台風が最接近していて、暴風雨のなか駐車場から美術館内に移動するだけでも大変な状況でした。しかし、館内に入ってしまえば、こちらのもの。特別展「澁澤龍彦幻想美術館」と常設展（三岸好太郎の素晴らしい《金魚》の作品がありました）を思う存分楽しむことができました。

夕食は、美術館のなかにあるレストラン「アクアマーレ」で、相模湾の魚介類と三浦半島の野菜など、新鮮な食材を使ったイタリア料理のコースを堪能しました。

さて、台風一過の晴天となった２日目は、生田緑地のなかに建てられた川崎市岡本太郎美術館へ。岡本太郎から遺贈された作品と資料による充実した常設展が素晴らしく、また岡本太郎の芸術に関連したテーマによる特別展「岡本太郎『藝術風土記』—岡本太郎が見た50年前の日本—」も面白い美術館でした。最後は《母の塔》の前で、参加者全員とギャラリー・トークをしてくれた岡本太郎美術館の学芸員と一緒に記念撮影。

読者の皆さんも協力会に入って、このように充実した美術鑑賞を体験できるツアーに参加してみませんか。（sy）

【編集後記】
少し前のことになりますが、名古屋市美術館の設計をされた黒川紀章さんが、お亡くなりになりました。心より、ご冥福をお祈りしたいと思います。黒川さんは、「共生」という思想のもとに建築に取り組んでこられました。今ほど人間と自然、西洋と東洋の共生が必要とされている時はないかと思います。進む自然破壊、西洋文明の行き詰まりとアジア諸国の台頭など、黒川さんが取り組んでこられた「共生」の思想の先駆性を思わせる事象には事欠きません。名古屋市美術館の建物は一見斬新なイメージですが、そこには日本に古来からある鳥居や茶室の造形などが取り込まれ、和と洋、現在と過去、そして未来の混在する設計となっています。名古屋市美術館に来館されたら、作品はもちろんですが、建物もよく観察して頂くと、また、違った楽しみ方ができるものと思います。黒川さんが施したいろいろな仕掛けを見つけてみてください。新しい発見があるかもしれません。（akko）

アートペーパー第76号 発行日：2008年1月1日
発行 名古屋市美術館［白川公園内］
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄《伏見駅・大須観音駅》下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜（祝日の場合は翌日）
Nagoya City Art Museum

古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

執筆者／神谷浩（hhk）、深谷克典（F）、山田諭（sy）、竹葉丈（J.T.）、角田美奈子（み。）、原沢暁子（akko）、笠木日南子（hina）、清家三智（3）、保崎裕徳（nori）